

名勝名古屋城二之丸庭園第13次発掘調査 現地説明会

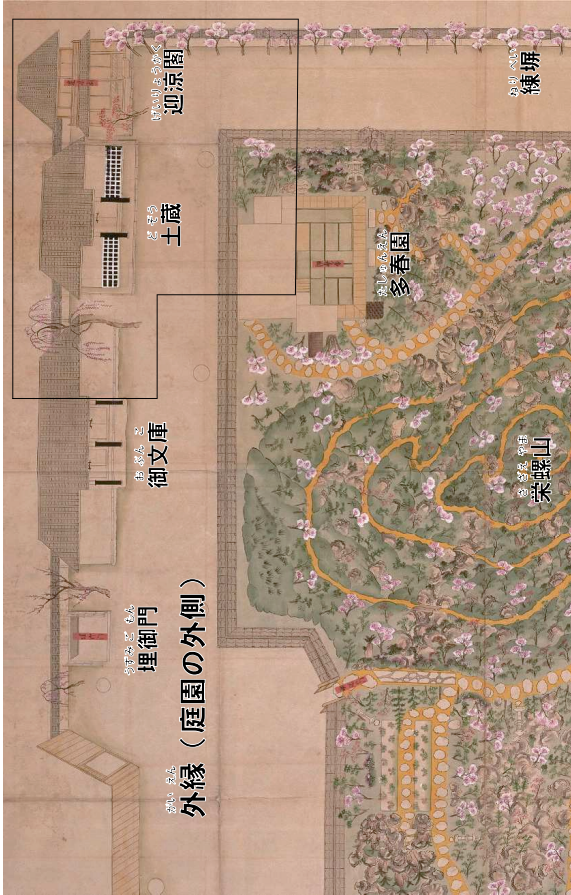
名古屋城調査研究センター

1. 発掘調査の経緯と目的

二之丸庭園では、19世紀に描かれた「御城御庭絵図」の姿を目指して復元整備のための発掘調査を実施しています。発掘調査は2013年から継続的に実施しており、今年で13回目の調査となります。今回の調査は、庭園北側の整備にあたって、地中に残存している遺構の情報を得るために実施しました。具体的には、絵図に描かれた近世の建物の範囲や構造、排水施設の位置、練堀（二之丸の北端・西端に築かれた堀）の構造、庭園範囲などを確認することを目的として、庭園の外側にあたる外縁を中心に調査区を設定しました。

年代	できごと
元和3年	二之丸御殿完成
寛永5年	「中御座之間北御庭」完成か（初代義直）
文化10～14年頃	風信・多春園等を設ける（十代斉朝）
明治6年	陸軍省所管となり、歩兵第六連隊が駐屯 二之丸御殿を取り壊して兵舎を建設
明治9年	二之丸北部に兵舎建設か
昭和23年	名古屋大学が旧兵舎を学舎として利用
昭和28年	庭園北部が国名勝指定
平成30年	庭園全域を国名勝指定

二之丸庭園の沿革



御城御庭絵図（部分、右が北側）【名古屋市蓬左文庫所蔵】 ☐ おおよその発掘調査位置

2. 発掘調査の成果 ※調査区の各位置（A区～D区）については裏面を参照してください。

①江戸時代の建物について

A区・B区で絵図に描かれている迎涼閣、土蔵、御文庫の基礎の石を検出しました。迎涼閣は古写真から石垣北端・西端から張り出すように建物が建っていたことが分かっていきます。今回礎石を検出したこととおおよそ4m×4m（2間×2間程度）の規模の建物と推定できました。土蔵は北辺・南辺の基礎石列が確認でき、おおよそ6.6m×3.4mの規模であると推定できました。石列上にはタイル状の瓦が立てて並べであり、なまこ壁（※）の一部である可能性があります。御文庫は調査区の南側にさらに続くため、建物の幅までは明らかにできませんでした。

また、A区の西側の床面を精査したところ、迎涼閣は土蔵よりも後に築かれたことが判明しました。（※）なまこ壁…主に建物の壁面を強化するために外壁に瓦を貼り付けたもの。

②石組溝について

B区西側で東方向に延びる石組溝を確認しました。石組み溝の底は平滑に加工された花崗岩類で、側壁は1段目が花崗岩類、2段目と3段目が砂岩で構成されています。

石組溝の流末は西石垣に突き出ている石樋と考えています。しかし石樋の底部より石組み溝の底部の方が低く、現状では外部へ排水できません。このことから石組溝と石樋は何度が改修されていると考えられます。

③練堀について

A～C区で練堀の基底部を調査しました。基底部は、城外側は石垣の天端石上に設置され、城内側は盛土上約5cm×10cmの川原石を据えた上に設置されていました。これは石垣の天端石の上面が水平ではないため、背後に盛土と川原石を使用して平坦面を造った上で練堀を施工したためと考えられます。また、C区では、現存する練堀の下から、練堀と同じタタキ製の構造物が出土しました。現存する練堀に先行する練堀、もしくは現存する練堀の基礎の一部と考えられます。

④庭園境界について

平成26年度の調査では、多春園の土間と考えられるタタキ、及びそれに沿って南北方向に並ぶ堀の礎石が検出されています。今回はD区でこの礎石に並ぶ形で新たに礎石を1石確認しました。

⑤陸軍期（近代）の遺構について

調査範囲のほぼ全域にわたって、明治時代後半～昭和時代初頭に陸軍によって築かれた演武場のセメント製基礎を確認し、その内側にあたるD区の北側では、礎石・東石（床の柱を支える石）が確認されました。

3. 今後について

今年度には、さらに東側へ調査区を広げ、庭園境界がどのように続くのか、練堀基礎がどのような構造になっているのか、などについて調査していきます。

※本資料は調査中の所見をもとに作成しているため、今後の調査で見解が変わる可能性があります。

二之丸庭園第13次調査区全体図



①A区北端 練堀と築石の関係 (西から)



②迎涼閣の礎石 (南から)



③土蔵基礎 (北側) (北から)



④御文庫基礎 (手前) と練堀廃棄土坑 (南から)



⑤C区北端 練堀の背面構造 (南から)



⑥近代建物の礎石・築石と堀基礎 (南から)



⑦石組み溝と土蔵基礎 (南側) (東から)



⑧御文庫基礎 (東から)

